

平成 28 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 29 年 4 月 23 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	野町 素己	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・准教授
	2		
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	笹原 健	麗澤大学・非常勤講師	ソルブ語学
	研究テーマ		
	上ソルブ語における情報構造		

研究成果の概要

ドイツで話されている上ソルブ語は、同一語族であるが語派の異なるドイツ語と、長年にわたる言語接触の歴史を有している。また、すべての上ソルブ語母語話者が、事実上ドイツ語との二言語使用者である。これらの事実に鑑みつつ、上ソルブ語において文が完結したあとに現れる要素（付加疑問、言い換え、言い直し、など）の記述を、ドイツ語と対照しつつおこなった。当該年度では、以下の2つのテーマに絞って取り組んだ：

- (a) これらの要素はどのような場合に用いられるかという観点からの類型、
- (b) その中でも顕著に見られる話者の心的態度を表す場合の上ソルブ語・ドイツ語対照。

なお、考察にあたっては問題の事象の記述にとどまらず、その背後にはたらいている原理を明らかにしようと努めた。

(a)に関しては、上ソルブ語とドイツ語において大きな差異が見られなかった。このことを支持する要因としては、歴史的要因とソルブ語話者の心的要因をあげることができる。ドイツ人とソルブ人は、1000年以上にわたる接触の歴史があることがわかっているが、その内容は文化的・経済的・言語的と多岐にわたっている。また、現代ソルブ人のソルブ語使用において、ドイツ語への指向性をうかがわせる現象もある。このテーマについては、以下の[1]として口頭発表を行った。

研究成果の概要（続き）

(b)に関しては、文が終止したあとに現れる心的態度を表す要素は、単に話し手の心的態度を表すだけではなく、文を終止していることを聞き手に伝える機能があることが指摘できる。ドイツ語では「枠構造」のように文末要素が指定される文が多いいっぽう、上ソルブ語にはそのような文法的構造がない。実際の使用例での頻度からも、文終止機能を想定することが可能である。このテーマについては[2]として口頭発表を行い、シンポジウム出版物の採択を受け、平成29年度中に公刊される予定である。

以上に加え、ロマンス系諸言語とスラブ系言語の接触にもとづく言語変化の例として、クロアチア語チャ方言の専門家である Sanja Vulić（ザグレブ大学、クロアチア）を招聘し、音韻および語彙のレベルでの影響関係について、東京と札幌で計2回の講演会を組織した。合わせて当該領域における今後の共同研究についての方針について討論した。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

- [1] Sasahara, Ken. “Sentence closing pattern in Upper Sorbian with contrast to German”. The 3rd international conference titled Various Dimensions of Contrastive Studies (V-DOCS 2016)（於 The University of Silesia, Poland）. 2016年10月24日－25日.
- [2] Sasahara, Ken. “Modal expression as sentence-closing marker in Upper Sorbian”. 2016 International Symposium on Verbs, Clauses and Constructions（於 University of La Rioja, Spain）. 2016年10月26日－28日.
- [3] Vulić, Sanja. „Iz vokalizma i prozodije cakavskoga govora Primostena Burnjega“ *Slavia Iaponica* XX (2017), pp.31-51.

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

新コーパスに基づくカシュブ語文法の多階層的研究（科研費基盤研究（A）、研究代表者：野町素己）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。